

第7章

青森県のりんご輸出の動向

三井 士郎

第1節 青森りんご生産の現況

りんごと言えば、誰もがまず青森県を思い浮かべるであろう。日本全国の2003年産のりんご生産量は、表2のとおり約84万2千トンとなっているが、その内、青森県では、約42万4千トンのりんごを生産しており、全国生産量の50.5%を占めるに至っている。参考までに、福島県のりんごは、全国第5位の生産量（約3万8千トン）であり、生産シェアは約4.6%となっている。青森県内で最も盛んにりんご栽培が行われている地域は、弘前市を中心とした中南農業地域であり、県内の約70%のりんごが当該地域で生産されている。品種については、表2のとおりであり、ふじが青森りんごの全生産量の50.8%を占めている。

表1 2003年産りんごの各県別収穫量

(単位:トン)

	青森	長野	岩手	山形	福島	秋田	北海道	その他	全国生産量
生産量	424900	182500	60200	52700	38600	38600	12100	32500	842100
生産シェア	50.5%	21.7%	7.1%	6.3%	4.6%	4.6%	1.4%	3.8%	100%

出所:農林統計

表2 2003年産青森りんごの品種別生産量

(単位:トン)

	ふじ	ジョナ ゴールド	王林	つがる	陸奥	その他	全国生産量
生産量	215900	62500	45800	44700	16400	39500	424900
生産シェア	50.8%	14.7%	10.8%	10.5%	3.9%	9.3%	100%

出所:農林統計

青森でりんごを生産するに当たっての課題は、4点挙げられる。1点目は、りんごの消費量の減少である。特に若者がりんごを食べなくなっていることが大きな原因となっている。2点目は、農家の高齢化と農家数の減少である。これは、農業全般の問題でもあるが、需要が伸びないことなどにより、新たにりんご栽培を始めようとする農家がなかなか現れず、高齢化が進んできており、農家数についても、減少傾向が続いている。3点目は、生産の省力化・効率化が十分に進んでいないことが挙げられる。先に述べた農家の高齢化と農家数が減少に加え、青森県はりんご栽培の歴史が古いことから、樹木の老齢化により生産力が低下している。そのため、生産の省力化・効率化が求められており、わい化栽培¹などを導入しているものの、十分に普及が進んでいないのが現状となっている。4点目は、需給調整機能の欠如である。以前は、りんごの生産量が需要量を上回った場合、ジュースなどの加工品の原料としてりんごを使用することにより、りんご価格の下落をある程度、緩和することができた。1990年、りんご果汁が輸入自由化となった後は、オーストラリア・中国などから大量のりんご果汁が輸入された。そのため、国内の余剰りんごを加工品に回して、需給調整を図ることにより、価格の下落を緩和させることが難しくなってきたという状況が生じている。

このような課題がある中で、青森県やJA全農あおもりなどでは、国内消費の減少を補い、りんご価格の安定を図る方策として、りんごの輸出に力を入れてきた。表3は、青森りんごの国別輸出量を示したものである。この表から分かるとおり、全輸出量の約95%が台湾向け輸出（2003年産）になっている。また、中国への直接輸出については、その他の分類に含まれるが、2003年産から輸出が始まったばかりであり、ごく僅かな量となっている。本章では、台湾と中国への青森りんご輸出についてヒアリング調査の結果を報告したい。

第2節 台湾へのりんご輸出

台湾へのりんご輸出は、1955年、日台貿易協定の中の品目にりんごが加えられてから本格的に行われるようになった。台湾では、殆どりんごは生産されておらず、アメリカなどからりんごを輸入してきた。台湾は、日本に対し一定のりんごの輸入枠（当初400トン、1997年からは2000トン）を設けきた。その後、台湾が2002年1月にWTO加盟を果たすと、輸入制限が撤廃されたため、日本から台湾へのりんごの輸出は急速に伸び、2003年産で約15000トンのりんごが輸出されている。台湾で、売れている品種は、世界一・陸奥・ふじ・金星などの大玉品種が中心であり、贈答用や神仏供養のために購入されている。前述した品種以外にも、王林という緑色のりんごも味が認知されて、出回るようになってきている。また、

1 わい化栽培は、これまでのりんごの樹に比べて樹が小さくて、作業がしやすいうえに早く結実し、品質も良く、多収穫も期待できるなどの利点がある。

表3 青森りんごの主要輸出先別輸出力

(単位:トン)

	台湾	香港	フィリピン	シンガ ポール	タイ	インドネシア	アメリカ	ニュージ- ランド	その他	計
1989年産	400	186	28	134	124				26	898
1990年産	400	150	121	146	217				40	1074
1991年産	200	42	17	45	249				10	563
1992年産	400	536	246	71	519				61	1833
1993年産	400	518	188	91	636				77	1910
1994年産	400	242	7	86	778	139	15	6	5	1678
1995年産	600	333	24	205	968	189	41	3	58	2421
1996年産	1220	389	61	402	1024	298	34	3	52	3483
1997年産	1712	801	14	271	345	48	44	3	261	3499
1998年産	1756	377	9	59	224	13	35	3	88	2564
1999年産	1725	214	12	97	198	44	43	3	44	2380
2000年産	1549	239	5	36	210	46	43	3	29	2160
2001年産	5522	360	10	111	164	47	45		134	6393
2002年産	11213	233	12	27	207	62	58		33	11845
2003年産	14994	211	5	41	205	75	61		66	15658

注:1 青森県の数値は、1995年産までは輸出検査実績から集計。1996年産以降は日本貿易月表からの推計

注:2 県外市場に出荷されたものからの輸出を含む。

注:3 2003年産については、台湾のWTO加盟による割当制撤廃により推計が困難となったことから、全国の数値を掲載している。

注:4 2003年産は2003年10月～2004年8月までの輸出力

出所:青森県農林水産部総合販売戦略課作成資料

小玉のふじについても、日常的に食べることができるりんごとして、売れ始めている。日本産りんごの価格については、ふじが1個250円～300円で売られており、贈答用の陸奥については、1個620円～1500円という高額な値段で売られている。また、アメリカ産のふじについては100円程度、韓国産のふじについては130円程度で売られているとのことだった。

第3節 中国へのりんご輸出

中国における日本のりんごについては、香港へ輸出されたものが、一部、中国本土に流れて、販売されることがあったが、中国への直接的なりんご輸出は、昨年始まったばかりである。中国への輸出については、現在までに、3つのプロジェクトが実施されてきた。そのプロジェクトは、青森県（青森県物産協会）による輸出、JA全農あおもりによる輸出、東北大学大学院情報科学研究科の稲村肇教授と弘前市の片山りんご有限公司の片山寿伸氏による輸出である。それぞれの輸出は、まだ本格的なものではなく、試験的に行われているに過ぎない。ここでは、それぞれの輸出について概略を記述することにする。

1.青森県(青森県物産協会)による輸出

青森県が、中国・上海へのりんごのテスト輸出することを決定したのは、平成16年1月頃であった。テスト輸出は、青森県の関連団体である青森県物産協会と民間会社である(株)JCKと共同で行うことになった。(株)JCKは、中国から土木・建築資材を輸入している会社であり、中国との貿易業務を熟知していた。また、今回、中国・上海でのりんごの販売場所となったデパート(上海久光百貨)との関係もあったため、青森県は(株)JCKをパートナーとして決定した。

上海久光百貨を販売場所として選択したのは、当該デパートが近々オープンを予定しており、そのオープンに合わせて青森のりんごを宣伝販売することが効果的であると考えたことからだった。しかし、結果的には、当初3月末にオープンする予定であった上海久光百貨が5月末まで延期となってしまったため、りんごを販売することができるぎりぎりの時期になってしまうなどの事態が生じた。中国では、小売店などのオープンが延期となるのは珍しくないため、オープンに合わせて品物を販売する場合は、相当な注意が必要になってくる。

今回輸出用りんご(2950キログラム)を提供したのは、青森県物産協会の会員の業者だった。品種については、大玉品種である陸奥(150キログラム)とジョナゴールド(200キログラム)に加えて、日中両国において最も多く生産されているふじ(2600キログラム)が輸出された。中国への輸入許可手続きは、3月17日に上海政府への申請を行って、4月1日に許可が下り、その後、北京の中央政府で申請を行い、最終的な許可は4月19日に下りた。(株)JCKが申請手続きを行ったが、大きな問題が発生することもなく、比較的スムーズに許可を得ることが出来た。5月10日に農林水産省横浜植物防疫所青森出張所で輸出検査を受けた後、5月14日に東京港から船で輸送した。東京港を利用したのは、(株)JCKが通常利用している船便があったからだった。5月18日に上海港に到着し、通関と植物検疫が同月22日に終わった。上海での通関・植物検疫の手続きや保管などの業務は、上海百紅商業貿易有限公司(以下、上海百紅)が行ったが、大きな問題はなかった。また、りんごの状態についても、輸送時の痛みや現地での貯蔵障害もなく、品質は比較的良好に保たれていた。上海久光百貨でのりんご販売は、6月6日から開始した。ただ、同店は、5月31日に地下食品売場が仮オープンとなったばかりで、りんご販売の宣伝もほとんどしていなかったため、お客は極めてまばらな状態であった。その中で、販売員を使って積極的に試食販売等を行った結果、ある程度の売上げを達成することができた。価格は、陸奥が1個610円(青森県物産協会卸売価格:250円)、ジョナゴールドが1個290円(同卸売価格:290円)であり、ふじについては、1個510円(同卸売価格:196円)のもの、1個260円(同卸売価格:80円)のもの、1個175円のもの(同卸売価格:59円)のものがあった。その中で、大玉品種である陸奥やジョナゴールドが好評で、ギフト用として購入するお客が多かった。

今回の試験的な輸出の試みにより、青森のりんごはギフト用として販売することができ

ることが分かったと同時に、中国において青森のりんごの認知度はまだまだ低いため、より目立つ包装や試食販売など販売時における工夫の必要性も感じたとのことだった。青森県では、今後も中国での青森りんごの販売促進活動を継続していく予定である。

2.JA全農あおもりによる輸出

JA全農あおもり（以下、JA全農）では、以前からりんごの新たな輸出先として中国を考えていたが、某輸出業者から試験的に輸出してはどうかとの話があり、上海への輸出を行うことになった。2004年1月に、2003年産のりんごを4500キログラム、2004年8月に2004年産のりんごを1000キログラム、2004年12月には同じく2004年産のりんごを500キログラム輸出した。品種については、世界一・陸奥・王林といった大玉品種である。JA全農は、輸出業者にりんごを引き渡すだけだったため、輸出過程の詳細については、把握していなかったが、税関や検疫においても大きな問題は起こらず、スムーズな輸出ができたとのことだった。これは、日本側の輸出業者からりんごを受け取った中国側の輸入業者が、中国政府への対応を熟知していたことが大きく影響しているのではないかとのことだった。りんごの輸出業者への卸売価格は、陸奥で10キログラムあたり6000～7000円（26～32玉）、世界一で5キログラムあたり約3000円（10～13玉）くらいであり、中国での小売価格については、1玉1000円以上だったと思うが、はっきりとは確認していないとのことだった。販売場所は、上海第一百貨商店とカルフル（上海）であった。店頭での青森りんごの評判はよく、ギフト用などで購入するお客が多かった。JA全農では、現在契約している輸出業者に追加して、新たに2社の業者と契約し、今後も中国への輸出を拡大していくことを考えているとのことだった。

3.東北大学大学院の稲村教授及び片山りんご有限会社の片山氏による輸出

今回のプロジェクトは、稲村教授の発案に片山氏が協力する形で行われた。稲村教授は、将来、アジアの市場統合が進み、アジア諸国から安価な農産物が日本に入ってくることになった場合、日本農業は相当な打撃を受けることが予想されるが、日本が付加価値の高い農産物の生産に特化し、その農産物を輸出することで、日本の農業は生き残っていけると考えていた。今回りんご輸出を行った目的の一つには、前述の考えを実証するためということがあった。中国では現在、約2000万トンのりんごが生産されているが、日本では、僅か90万トンのりんごしか生産していない。今後、市場統合により、中国から安価なりんごが輸入されると日本のりんごの生産量は、ますます減少してしまうことが予想される。そうなった場合、日本で、大きさ・色・味などで中国のりんごと差別化を図ることができるりんごを生産し、中国において高価格で販売することが出来れば、日本のりんご農家は存続できると稲村教授は考えていた。

実際の輸出の経過は、以下の通りである。今回、輸出をしたのは、2003年10月に収穫し

た陸奥という品種のりんごであった。品種を陸奥にしたのは、大玉のりんごであれば、中国でもギフト用として販売できると考えたからだ。国内に流通している陸奥の通常の大きさは、400グラム前後が主流となっているが、今回は更に大きいもの（450グラム前後）を輸出した。2004年2月中旬、CA冷蔵²で保存を行っていた収穫後の陸奥を中国へ輸出することを決定した。中国での輸入許可申請については、中国側の輸入業者を通じて2004年1月中旬から行っていたが、結局、輸入許可が下りたのは、3月22日と2ヶ月近くの期間を要した。日本での輸出準備については、輸入許可が下りる前の3月17日からりんごの箱詰め作業を行っていた。同月23日には日本側の植物防疫の許可が下りたため、同月24日に秋田港に運搬、同月27日に秋田港を出港、4月4日に天津新港に入港した。

天津新港では、通関・植物検疫の手続きに8日ほどの時間がかかった。その間、りんごは保税倉庫の中で保管されていたが、温度・湿度等に問題はなく、良好な状態でりんごを保管することが出来た。

その後、りんごは、卸売業者である北京果品公司以小売業者に販売されたが、北京果品公司では、品質に関して概ね良好との評価を受けた。また、北京のスーパーなどでの小売価格は、1個840円程度であったとのことだった。

稲村教授と片山氏は、2004年12月にも、2004年産のりんご（陸奥）を約2000キログラム、北京に輸出しており、今後は広州などへの輸出も検討しているとのことだった。

おわりに

ここまで、青森りんごの中国への輸出の取り組みについて述べてきたが、このような試験的な取り組みにより、青森りんごが中国においてある程度売れることが証明されており、今後も、ますます中国への輸出が増加していくことが予想される。

中国では、品質さえ良ければ、どんなに高価格な農産物・加工食品であっても購入する世帯が日々確実に増大している。

今回の青森りんご輸出のヒアリング調査を通じて、私見ではあるが、福島県の農産物・加工食品についても、品質や見栄えのよいものであれば、高価格なものであってもギフト用として中国で売れる可能性は十分あるのではないかと感じた。

² Controlled atmosphereの略で、りんごの追熟を抑えるために、凍らないぎりぎりの環境（絶対零度）下で、酸素濃度を下げて保存する方法。